

エステバン・マルティン／アンドレウ・カランサ著 ^{きむらひろみ} 木村裕美訳 ^{かぎ} 「ガウディの鍵」 集英社文庫、2013 年 10 月 25 日集英社刊を読む(2)

1. 「ごめんなさい。ちょっと自分のことで頭がいっぱいだったから」

「ねえマリア、タイマツが、とてもおもしろいコメントをしたよ。日本では、あまり明け透けだと、よく思われない、表現のしかたに、いつも暗に含んでるものがあるんだって。もちろん絶妙な方法でだ。欧米人みたいに、はっきり物を言いすぎると、日本人はすごく嫌がるそうだよ。だから、あんなにガウディが好きなものかもしれないな。彼の作品はシンボルだらけだろ。見た目は岩とか、樹木とかで……」

2. タイマツが割って入った。

「みんな自然を映したもののなのよ。彼の建築表現には直線がない、みんな曲がっているでしょ。曲線ばかりなのは、自然界に直線というものが存在しないから。どの細部をとっても、たぶん隠れた意味がこめられていて、ほとんど理解できない秘教じみたシンボルもけっこう使っているわよね。わたしは審美だけの問題じゃないと思う。直接的な表現法ではないからこそ、解釈が必要になってくる。石や、レンガや、^{トランカディース} 砕きタイルを読まなくちゃいけないの。微妙にほのめかす技、口にせずに伝える技、それは禅なのよ。ガウディは自分の建築に真の秘密を隠すことを知っていた。ひとりひとりが、その秘密を発見できるように、わたしたち自身の精神性が見つかるようにしたのね……。彼の建築、あの豊かなシンボルの体系は“道”、悟りにいたる道なのよ。ガウディは物語をきかせてくれるけど、彼の建築表現には種明かしがない、秘密は秘密のままだわ。わたしたちに果実を与えて、その味、その手触りは、自分で見つけなさいというわけね。嚙ってある果実を、もしガウディがもってきたら、そこには、どんな意味があるかしら……それが禅の道、暗示なのよ。なにも言っていないようで、じつは、すべてが絶妙にこめられた言葉。指は星をさして、その星をながめるのは、わたしたち自身なの。生け花や盆栽の芸術もそうだけど、ガウディの建築の場合は、^{すいせき} 水石に、もっとずっと近いと思う」

3. マリアは当惑した。目顔で友人にきくと、相手は答えた。

「^{さんすいけいじょうせき} 水石は“山水景情石”からきた言葉。山、水、景色、感情の意味よ」

「スイセキって？」

「石の芸術……命水石、自然がつくる芸術のこと。かなり起源が古くて、もとは中国で、紀元前 2000 年に生まれたものだけど、日本には 5 世紀に伝わってすぐ親しまれるようになったの」

「なるほど」とミケルは低くつぶやくように言い、記憶をたどろうとした。「そういえば、展覧会を見たことがあるな。小さな石で、ミニチュアの景色みたいなやつだよ」

「それが水石の芸術、景色つまり森羅万象をあらわした石なの。自然石が景色全体を彷彿とさせる。ひとつの宇宙をよ」

4. 「盆栽のようなもの？」

マリアがたずねると、タイマツが答えた。

「ある意味ではそうね。盆栽がミニチュアサイズの生きた樹木の再現とすれば、水石はミニチュアの景色かしら。広大な景色を、ぐっと縮小したモデルみたいな一個の小さな石だわね。ただ水石は、盆栽とはちがう芸術よ。もっと複雑で奥深くて、いまでも言ったけど、禅や茶道と密接な関係があるの。水石は、水の流れて生命をもつ石。全宇宙を調和させる侘びと寂び、そういう、きわめて日本的な思想につながるわ。ガウディの建物、手がけた作品、とくにグエル公園は水石よね。それにラ・パドレーラとかは、いまの話しの顕著な例だわ。建物を石に見立てるなんて、ほんとうにすばらしい、水石とおなじで、自然から創った芸術、生きている景色をそっくり映した小さな鏡のようなものでしょ。わたしたち日本人には、だから、とても魅力的なの」

5. タイマツは、じつに教養のある女性だ。説明を一から十まで聞かされて、さすがのミケルも舌をまいた。彼女の言うことには終始深みと美しさがある。だが、なにか隠れたもの、ジベル氏の一件につながるものも、うかがえた。蜘蛛の巣にでも捕らわれたように、自分たちをがんじがらめにするものが……。『第三の門の獣』を殺し、秘密を探し、それがマリアの祖父のメッセージだ。彼女はまさしく選ばれた者なのだと。さらに聖クリストフォルス教会の司祭、ジュナス神父の死……。神父は、なにを知っていたのか？ なにを書き残したのか？ 自分が現場に行くことが、どうして神父にわかったのか？ 解説すべき、あの謎めいたメッセージを、ジュナス神父が誰かのために残したとすれば、それはマリアをおいて他にない。天空を横ぎる彗星、宇宙を旅する星のごとく、そんな思いがミケルの頭にいちどに通りすぎた。不安をかきたてる光景の連続だ。あの教会が祀る旅人の守護聖人、聖クリストフォルス……。こんな考えが、なぜうかぶのか？

タイマツが彼を、思考から会話にひきもどした。

「ねえ、たとえば、いまわたしたちがいる場所」とタイマツが言い、むかひのカザ・パトリヨを指さした。

6. 三人とも建物のほうに目をむけた。

「ガウディがあそこを建てているとき、当時の人は『骨の館』って呼んだのよ。童話に出てくるお家に似てるし。ほら、あの……」

「ヘンゼルとグレーテル？」とマリアが指摘した。

「そう、それ！ だって見てよ、あの鋳鉄の欄干。仮面みたいでしょ、なんとなく……日本の能面って感じ？」

「そうね、タイマツ、あなたの言うとおりの。あの美的感覚って、いつか連れていってもらった人形芝居をよく思いだすわ。『曾根崎心中』だっけ。すてきなお話だったわね」

7. 「日本には仮面や人形をつかった、いろんなスタイルのお芝居があるの。あの作品、『曾根崎心中』は、文楽っていう様式で演じられるんだけど、日本でも指折りの美しいものよ。人形がまず、すばらしい。三人の人が操っていて、そのほかに義太夫節の語り手がひとり、あとは三味線の弾き手。わたしは近松門左衛門が書いたこの作品がいちばん気に入っているの。17、18世紀の作家で、日本のシェークスピアとも言われてる人だけど。『曾根崎心中』は、『世話物』とよばれる物語の最初のものなのよ」

8. あの恋人たちの物語を、マリアは思いだした。はじめにタイマツからきき、実際の上演も、後日
見ることができた。主人公は、徳兵衛という大阪の醤油屋の手代、それに堂島新地の遊女、お初。
ふたりの愛は悲恋だ。お初は天満屋という娼家で悲しみにしずんでいる。徳兵衛は宵闇にまぎれて、
彼女を迎えにいき、ふたり手に手を取りあって、真夜中に人目をしのんで逃げだすのだ。夜が白み
だすころ、ふたりは曾根崎天神の森で心中する。目撃するのは、木の枝にとまるカラスだけ。漆黒
の鏡に似たその暗い目に、心中の光景が映っている。カラスの、あの陰鬱な野生の眼光が、マリア
の脳裡に焼きついてた。

9. 彼女は、カザ・パトリヨを指して言った。

「だけど、あそこの欄干の仮面、見るたびに、ちょっと怖くなる」とマリアが言った。

「どうして？」ミケルがきいた。

「『悪の仮面』っていうタイトルの詩、ふたりとも覚えている？」

「ブレヒトの詩でしょ？ ベルトルト・ブレヒトの」とタイマツが言った。

マリアは吟唱した。

《わたしの壁に、日本の面がひとつ、掛けてある。

金塗りの、悪霊の面、

哀れみの目で、わたしは見る、

ひたいに膨れあがる青筋が、明かしているではないか、

悪でいることが、いかに努力のいることか》

タイマツが笑って言った。

「考えすぎじゃない？あの仮面もどきと、ブレヒトの詩がむすびつくなんて、思いもよらなかったわ」

「まあ、違うといえば違うけど。ただ、あの詩を思いだすっていうだけ」

10. タイマツは話題を変えたくなくて一多様な日本の舞踊や演劇、舞台芸術のことをしゃべりだすと
止まらず、ブレヒトの作品もまたしかり一、話の矛先をまたもどした。

「カザ・パトリヨの歴史は知っておく価値ありよ。そう、修復の話。邸宅そのものは以前からあつて、実業家のジュゼップ・パトリヨが購入したの。なんてことのない館でね。ガウディに修復の依頼があったのは 1904 年。革新的な彼の手にかかって、結果的に、もとの建物は見る影もなくなったわけ。たとえば正面のファサードは、完全に新しくなったわね。モンジュイックの丘の石を細工したもので、波状の表面をよく見てほしいんだけど、あれは尖ったハンマーで打ったあとに、色ガラスや、彩色陶器を埋めこんでいるのよ」

「そう、それで、あんな独特のものが出来たのね。なんだか鏡みたい」とマリアが言った。

11. 「朝の光が真正面からファサードにあたると、その反射で、ガラスの彩色が虹色に輝くだろうというアイディアだったの。ガウディ本人がグラシア通りのまんなかで、歩道に立って職人たちに直接指示したんですって。砕いたガラスや陶器の入った大かごを並べて、どの破片が合うか決めながら、言われたとおりに職人がファサードに埋めていったのよ」

12. ミケルとマリアはパトリョ邸をさんざん見ているが、それでも見るたびに感動する。相手が人であれ物であれ、知れば知るほど、その価値がわかるというものだ。

「上のほうの、あれは？ ほら、波形の屋根の」

「円柱塔のところで頭が切れて、尻尾もないドラゴンよ。球体とか半円筒とか、形のちがう大型陶器で出来ていて、いろんな色に変わるの」

「光で？」

「そう、光だよ。もちろん、陶器の彩色とか組み合わせでも」タイマツは口をつぐんでから、またつづけた。「おもしろいことに、パトリョ氏の手稿が残っているの。カタルーニャ工科大学のガウディ研究センター、カテドラ・ガウディにね。なんでも、単滑車一台で材料を全部もちあげて、足場は縄でくくった木組みだったんですって、パトリョ氏がそう説明しているのよ。使った材料は、レンガと、石と、石灰のモルタル」

「カテドラ・ガウディの誰か専門家と会うことはできる？」

「あなたのガウディについての研究とフラクタル数学のことで？」

「ああ」と、ミケルはごまかした。

「もちろんよ。いつならいい？」

「そうだな。なるべく早いほうがいいんだけど」

P220 ~ 226

[コメント]

ガウディを通して日本の文化を語る本書の著者であるお二人のスペインの知識人の一言、一言は、日本人としてのアイデンティティとは何かを考えるとときにとても参考になる。

— 2013 年 12 月 26 日 林 明夫記 —